

交牧連の活動日誌

～みんな違う みんな仲間～

第10回 地域と連携した食育活動

酪農体験が子どもたちの成長の糧となるように

地域交流牧場全国連絡会九州ブロック(大分県杵築市 山本牧場) 山本 博文

山本牧場は、14歳で入植しクワ1本で土地を開墾した父が、18歳の時に長野県の研修先でホルスタイン3頭を譲り受けたことから始まりました。私は1974年生まれで現在48歳ですが、物心つく前から牛はとても身近な存在でした。

大学を卒業した私は全国組織の専門農協に入り、9年間勤めた後に退職し実家で就農しました。地域交流牧場全国連絡会(交牧連)には2018年に入会し、今年で6年目です。

輸入乾草の使用抑え

自給粗飼料主体のTMR製造

当牧場では私が就農した翌年(2006年)につなぎ牛舎を新築しました。44頭対応式を72頭規模に増床し、搾乳ユニット自動搬送用レールを設置。TMRをつくるミキサ、自動給餌機、自給粗飼料を切断するロールカッターなども導入しました。自給粗飼料は10haの飼料畑にイタリアンライグラス、ヒエ、エン麦を作付け。これに加え、25年ぶりに6haほどでWCS用イネと主食用水稻(稲わら)を栽培し始めました。昨今の輸入乾草の高騰を受け、もう少し作付面積を増やしていきたいと考えています。

私が担当する日々の作業は繁殖管理、給餌、搾乳が中心で、

繁殖については家畜保健衛生所による毎月の妊娠鑑定時に、お世話になっている獣医師と私の3人で協議して、個体に合った対処を行い、長期未受胎牛には和牛の受精卵移植を積極的に実施。給餌では輸入乾草の給与を極力控え、自給粗飼料を中心に配合飼料と混合したTMRを1日2回製造しています。

乾乳牛は専用の乾乳舎へ移動させ、分娩後に搾乳舎へ戻すのですが、乾乳舎へ行く時にフラフラ歩いていた牛が、分娩後にスタスタ歩く姿には驚かされます。牧草地の管理、堆肥処理は従業員に任せています。

子どもたちの喜ぶ顔が原動力に

就農して間もない頃、地元青年部の仲間と学校などに牛を持ち込み、搾乳や哺乳、アイスクリームづくり体験を行っていました。かなり好評で、ある小学校ではいつも残っていた給食の牛乳がほとんど残らなくなったと聞きました。

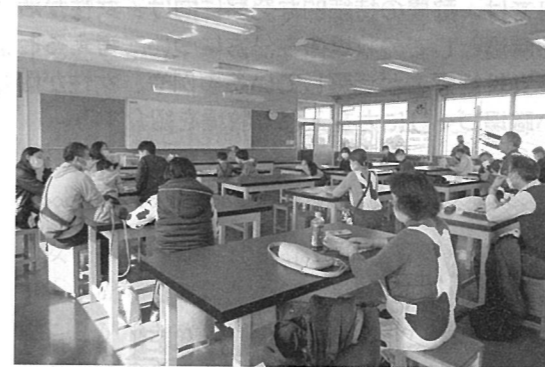
こうした活動を続けていると、ある時、同じ地域



牧場で実施した酪農体験でバターをつくる子どもたち



約3年ぶりに開催したわくわくモーモースクール



モーモースクールには熊本市内の教諭とその家族10人が参加した

住民から「小学生に牧場体験をお願いできないか」と相談されました。牛乳消費を拡大し酪農をもっと知ってほしいと考えていた私はこれを快諾。子どもたちを牧場に招き、搾乳、バターづくり、アイスクリームづくりの3本立てで牧場体験を提供。その後もたくさん子どもたちが牧場を訪れました。

当初はどのようにすれば子どもたちの理解が深まるのか勝手が分からず、酪農教育ファーム活動を行うためのファシリテーターの認証を持つ地域の酪農家に依頼して活動していました。やがて自分でも牧場体験を行えるようになりましたが、今度は受け入れ人数が増え、人手が足りなくなる事態に。大分県酪農協同組合に相談すると職員を派遣してもらえるようになり、何とか活動を続けられました。この職員から「酪農教育ファームの牧場認証とファシリテーターの認証を取ってみたい」と勧められ、取得しました。

搾乳を体験した子どもが「(生乳が)出たー!」とうれしそうに叫んだり、自分でつくったバターやアイスクリームをおいしそうに食べる姿を見たりすると、感慨深いものがあります。コロナ禍以降は思うような活動はできていませんが、今後はしっかり感染対策をして活動を再開したいと思っています。

綿密な飼養管理と繁殖で 難局乗り越える

酪農を取り巻く環境は、かつてないほど深刻です。コロナ禍、ウクライナ情勢、急激な円安による飼料高騰と、そこに追い打ちをかける牛乳・乳製品の消費低迷など、今までと同じ経営のやり方ではどうあがいても上向きには転じません。

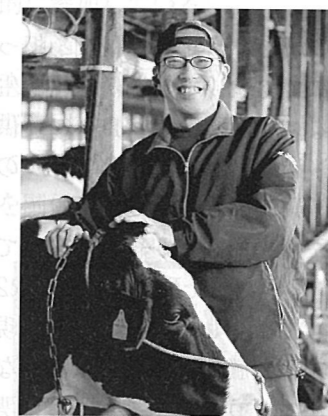
そうした中で思うのは、自分の牧場には改善できる小さな課題がまだあるということ。酪農協などと協力しながら、もっと綿密な飼養管理や繁殖へと見直していこうと考えています。また、

今まで培った観察眼をフルに発揮し、牛の微妙な体調の変化をいち早く感じ取り、ベストな選択をすることでこの難局を乗り越えていきたい。

大変な状況ではありますが、今後は勉強会などまだ参加したことのない交牧連活動にも積極的に参加したいと思っています。酪農教育ファーム活動で感じた疑問点や課題を、交牧連会員の皆さんとの活動を通じて解決し、日々の作業や酪農教育ファーム活動に生かすことでスキルアップが望めるでしょう。

牧場体験に来た子どもたちには酪農や牛、牛乳についてもっと伝えていきたい。交牧連に入る前の牧場体験では牛乳・乳製品の消費拡大が主な目的でしたが、子どもたちと触れ合うことで私の意識も徐々に変わってきました。今はもっと「食育」や「命」という観点から牧場体験を実施したい。人間が動物の命の上に成り立っていることを伝え、子どもたちの成長の糧になればいいなと思います。

交牧連の九州ブロックでは、22年11月26日に熊本県立熊本農業高校で第1回わくわくモーモースクールを開催しました。約3年ぶりの開催となった今回は、熊本市内の小学校教諭とその家族を対象に搾乳・哺乳体験、牛舎見学、畜産を学ぶ高校生や酪農家との交流会を実施しました。各県から集まった酪農家が消費者を前に酪農について自ら伝えつつ、体験によって消費者理解が深まるとても貴重な時間でした。第2回は23年1～2月に開催する予定です。



牧場には改善できる余地がまだある、と前を向く山本さん

牧場概要

牧場名 山本牧場
代表者名 山本 博文
所在地 大分県杵築市山香町大字野原4662
総飼養頭数 120頭(うち搾乳牛約50頭、和牛17頭含む)
年間生産乳量 約540 t

飼養形態 つなぎ飼

自給飼料畑面積 約10ha(イタリアンライグラスなど)
牧場スタッフ 5人(本人、妻、両親、従業員1人)
交牧連加入年 2018年
主な活動 酪農教育ファーム受け入れ(3件/年)

地域交流牧場全国連絡会(交牧連)に関するお問い合わせ先

(一社)中央酪農会議内交牧連中央事務局
TEL:03-6688-9841 FAX:03-6681-5295
メール: koubokuren@churaku.jp
ホームページ: <https://www.dairy-farm.jp/>
フェイスブック: <https://www.facebook.com/koubokuren>



【交牧連 HP】